

研究結果

研究テーマ：『中国現代話劇の発展における日本近代劇曲の影響』

二年にわたる研究により、次のことをまとめることができた。

中国現代話劇の発展に、日本の存在は大きい。

まず話劇人と日本の関係である。

中国現代話劇の誕生期、成長期、成熟期、具体的に言えば、20世紀の初めから40年代までです。話劇の団体作り、舞台活動、台本創作、話劇教育など各方面に活躍した人々の多くは日本留学経験を持っている。1906年東京にできた最初の留学生劇団『春柳社』の中心人物の李叔同、曾孝谷、任天知、陸鏡若、歐陽玉倩をはじめ、10年代の郭沫若、田漢、20年代の夏衍、30年代の杜宣、沙文漢、陳修良などは、皆日本で長く勉強した。日本で芸術を習い、新劇を観、日本の有名な俳優、作家の指導を受け、公演にも参加した。いろいろな形の勉強により、近代劇についての認識を深め、実践もしてきた。

次は日本文芸思潮の中国話劇人に与える影響である。

19世紀初めに日本に留学した李叔同、陸鏡若は坪内逍遙の文芸協会に参加したことがある。陸鏡若は帰国後文芸協会が上演したシェイクスピアの劇などを中国で公演させ、近代演劇の理念を実践した。厨川白村の新ローマン主義は田漢の早期創作に大きな影響を与えた。村山知義などの左翼劇場の30年代中国左翼話劇への影響もある。

また、日本新劇の中国での上演、翻訳出版である。

『春柳社』人たちが帰国して、日本の新劇（最初は壮士劇が多いが）を紹介、上演した。20年代から40年代までは菊池寛、山本有三、秋田雨雀、鹿地亘、前田河広一郎、武藤富男、武者小路実篤、木下順二、森本薫、水上勉、久保栄、松田正隆などの戯曲作が翻訳され、公演された。

新中国成立後、芸術のための日本留学はほとんどない。60年代友好交流でいくつかの日本の新劇が上演された。80年代に入って、ようやく日本新劇の研究、翻訳、公演などするようになった。

最後に、満州時代の話劇である。満州の話劇も新劇という。政治目的に合わせて運営された興亜新劇団、長春の大同劇団、瀋陽の協和劇団などは、満州のいわゆる建国精神の宣伝のため、治安思想工作のために活躍した。これらの劇団はいずれも日本人の指揮、指導のもとでやっていた。

本研究は、資料の関係で中国の話劇創作における日本新劇の影響についての研究が、まだ足りていません。これは今後の課題にします。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

- 1、中国における『父帰る』 日本文学研究会十一回年会 2008年8月20日 大連外国語大学
- 2、中国の日本文学教育における日本の近代戯曲
中国日本語教学研究会2008年度年会 2008年12月14日 広東外語外貿大学
- 3、中国における日本近代戯曲
第五回全国大学日本語教学研究国際シンポジウム 2009年12月12 - 13日 上海 同済大学

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

- 1、「満州における話劇」 孫耀珠 『華章』 2010年第5月
- 2、「中国における日本近代戯曲」 孫耀珠 『肇慶学院学報』 2010年12月
- 3、「日本文芸思潮の中国現代話劇にたいする影響」 孫耀珠 (投稿中)
- 4、「中国の話劇人と日本」 孫耀珠 (投稿中)

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)